

## 論説

### ISの戦略：シリア、イラク、リビア

太 勇次郎

NHKニューデリー支局長

前報道局国際部副部長

(中東アフリカ担当)

元カイロ支局長、イスラマバード支局長

#### 「サイクス・ピコの終えん」

ちょうど100年前。第1次世界大戦のさなかの1916年、イギリスとフランスなどが、「サイクス・ピコ協定」という密約を結んだ。中東を分割し、北西部をフランスが、南東部をイギリスが支配すると取り決め、今のシリアとイラクの国境の原型ができた。現地の実情を考慮しない恣意的な国境線で、イスラム教徒の異なる宗派の住民や、アラブ人とクルド人という異なる民族が混在する結果となった。これが、今の中東で起きている混乱の根源と言える。



2014年6月、ISは、インターネット上に、「サイクス・ピコの終えん」と題した映像を公開した。シリアとイラクの間の土が盛られた国境線を、ブルドーザーを使って取り払い、車両が自由に行き来できるようにした様子が映っている（左写真）。ヨーロッパの列強が

設けた「国境」という秩序を崩壊させ、シリアとイラクにまたがる新たな「イスラム国家」の樹立を宣言した。この映像の中で、ISの戦闘員は、「私たちにとって国籍は関係ない。私たちはイスラム教徒だ」とアピールした。

アラブ人にサイクス・ピコ協定について聞いてみると、「ヨーロッパのエゴの象徴」として、嫌悪の感を表す人が多い。ISは、こうしたアラブ人の心に響かせることを狙って、巧妙に映像を製作していることがうかがえる。そして、「イスラム教徒」というアイデンティティを強烈にアピールし、世界のイスラム教徒に、この「イスラム国家」に集まるよう呼びかけている。取材でイラク市民に話を聞くと、「彼らはテロリストではない。革命勢力を私たちは応援している」と話す人たちがいたのには、驚かされた。ISは、地元住民の支持も取り付けている。

#### ISの戦略

ISは、過激な思想を世界に拡散させて、存在感を高めると共に、シリアとイラクでの支配を安定的に維持しようとしている。

今年3月に起きたベルギーでの連続テロ事件では、地下鉄と空港が狙われた。去年11月には、パリで、サッカースタジアム、コンサートホール、レストラン街が襲撃され、不特

定多数が標的となった。事件には、シリアに渡ったベルギー人、フランス人が関与したとされ、いずれの事件も、I Sが犯行声明を出している。その中で、「シリアで空爆しているから」などとして、空爆に対する報復であることを臭わせている。

フランスやベルギーは、確かに、シリアで空爆を実施している有志連合に参加している。しかし、空爆の大半を実施しているのは、アメリカだ。今回の事件は、アメリカが狙われたのではなく、フランスとベルギーで起きたことに注目する必要がある。フランスでは、人口の1割近くがイスラム教徒で、移民が多く、貧困、差別、格差で社会に不満を感じ、I Sに共鳴する若者が大勢シリアに渡っている。ヨーロッパの中でも、最も多くの若者がシリアに渡っていて、いわばヨーロッパの戦闘員の供給国となっている。

そうした状況を考えると、事件の背景に当たる問題は、どうやら、ヨーロッパの中にあるようだ。I Sは、そうした若者の不満を利用しているにすぎない。

ベルギーの事件では、容疑者のパソコンが、ブリュッセル市内の路上のゴミ箱で見つかっている。その中に、「このままでは、いずれ捕まることになる」と書き残されていた。この容疑者は、空港で自爆している。パソコンに残された文章は、非常に後ろ向きな内容で、捜査当局の包囲網の中で追い詰められ、自爆に及んだようにも感じられる。しかも、パソコンはゴミ箱に捨ててあった。用意周到に計画した犯行であれば、こうした証拠となるものを、すぐに見つかりそうなゴミ箱に捨てることは、通常なら考えられない。

過激派の間では、こうした自爆は、ジハードによる殉教とされ、神に祝福されて天国への道が約束されると教え込まれる。そして、こうしたマインドコントロールされた人物は、自爆する前に、大抵、喜びの声や自ら陶醉した言葉を残すのがこれまでのケースだ。パソコンに「いずれ捕まることになる」と不安を吐露することは、パリの事件に関連した捜査が進み、追い詰められるという現実に向き合う中で、マインドコントロールの呪縛から解かれ始めていたのかもしれない。

I Sに参加したあと、故郷に戻った人の中には、イスラム教徒を助けるためにシリアに向かったものの、無謀な戦闘によって多くのイスラム教徒が死亡したりけがをしたりする現実を目の当たりにして失望した若者たちも多くいると言われている。

失望した一方で、故郷に戻っても、過激な思想に染まった若者たちは血縁関係があつたり、幼なじみだったりして、互いに影響を与え合っている。殉教のゆがんだ教えの呪縛からは解かれても、人間関係のしがらみからは解かれていなかったのかもしれない。過激派が自爆攻撃をする場合、自爆したかどうかを見届ける同行者、または監視役がいる。今回自爆した人物が、自主的に行ったのか、それとも、やむにやまれぬ、半ば強制的にやらされたのかは不明だ。

結局のところ、これらの事件で、I Sが犯行声明を出しているものの、具体的に指揮命令

をしたのかは、いまのところはわからない。ただ、こうしたテロはI Sの戦略ではある。I Sは、今、「個人」または「少人数のグループ」で、「ナイフでも石でも」なんでも手元にあるものを使って、よく知った場所で、身近な人たちを標的に攻撃をするよう呼びかけている。こうしたテロは、政府や国の象徴を狙った大規模なテロと、実は、同じような効果がある。都市部で起こすことで、パニックに陥れることができれば、世界のメディアが騒ぎ、市民の間で不安と不信感が広がり、テロの警戒を余儀なくされ、結果的に、その国の政府にダメージを与えることができる。今回のこれらの事件も、まさに、その典型だ。

### I Sはどうして生まれたのか

I Sには、わけがある。「テロは断じて許さない、I Sなんて軍事力で一掃してしまえ」では、本質を見失ってしまう。I Sを倒しても、I Sが誕生した理由を知らなければ、再びI Sと同じような勢力の誕生を許してしまう。

I Sの誕生には、3つの要素がある。「9・11」「イラク戦争」「アラブの春」。どれか1つでもかけていたら、I Sは現存していなかっただろう。



2001年9月11日にアメリカで起きた同時多発テロ事件（左写真）。これは、1979年のソビエト軍によるアフガニスタン侵攻から振り返る必要がある。アメリカとソ連の冷戦の代理戦争が始まると、イスラム教徒たちが世界中から、アフガニスタンの同胞を救うため共産主義政権と戦おうと、アフガニスタンの隣国パキスタンに集まった。アメリカは、彼らに軍事訓練を行って戦闘員として育成し、アフガニスタンに送り出した。そして、1989年、ソビエト軍が撤退すると、イスラム戦士とアメリカの勝利となった。

アメリカは、ここで大きな過ちを犯す。「恩をあだで返す」ことをしてしまう。冷戦の代理戦争に勝利したあとは、アフガニスタンのような小国には興味をなくし、パキスタンに対しても、核開発疑惑を理由に、経済制裁をかけて切り捨ててしまった。さらに、イスラム原理主義の思想は過激派につながって、いずれアメリカの脅威になるとして、各国に、こうした思想を排除するべく働きかけを強めていった。その結果、イスラム主義者は世界中で弾圧を受けるようになった。こうしたアメリカの態度に牙をむいたのが、アフガニスタンで戦うために世界中から集まったイスラム戦士が中心となって結成したアルカイダだった。

アルカイダは、アメリカによって育てられたイスラム戦士の集合体だった。注目したいのは、ソビエト軍が撤退し、冷戦が終結したあとも、大勢の若者たちがアフガニスタンに渡ったことだ。彼らは、世界中で弾圧を受けていたイスラム主義者たちだった。アフガニスタンに8000人近くいたとみられるアルカイダのメンバーは、実は、それぞれの国で、アメリカの意を受けた各国の指導者から弾圧を受けて逃れてきた者だった。イスラム主義者にとって、アフガニスタンは、弾圧を受けない、自由で安全な避難場所である「理想郷」

だったのだ。

アルカイダは、9・11後にアメリカ軍が軍事作戦を開始すると、「理想郷」であるアフガニスタンを失った。一部がイラクに渡り、その後、戦う「ジハード」の精神を引き継いで、I Sに形を変えていく。



2003年、アメリカは、大量破壊兵器疑惑を理由に、イラク戦争を開始した(左写真)。アメリカは、この時も、過ちを犯す。フセイン政権の徹底した排除を、結果的に、スンニ派の排除と「= (イコール)」にしてしまったのだ。

アメリカは、スンニ派中心のフセイン政権を倒し、シーア派中心のマリキ政権を誕生させた。マリキは徹底的にスンニ派いびりをして弾圧を続けた。結果的に、旧フセイン政権、そして、スンニ派が排除される雰囲気を作られてしまった。これが、I Sの誕生に大きく関わってくる。

I Sは、「国」という形での支配にこだわっている。それは、なぜか。マリキがスンニ派を弾圧したため、I Sは、このスンニ派の不満を取り込んでいった。I Sがいわば、スンニ派の避難場所となっていた。今、I Sには、旧フセイン政権の幹部のほか、スンニ派の様々な勢力が参加している。単なる過激派集団ではなく、地元のスンニ派の住民たちが支える組織となった。スンニ派のある部族長が「政府から見捨てられた私たちの気持ちも分かってほしい。I Sもひどいが、マリキよりはまし」と話していたのが、まさに実態だった。



2011年の民主化運動「アラブの春」(左写真: エジプト)は、軍の力を背景にした独裁政権が長く続いている間に、国民の不満が積もりに積もってピークに達して起きた。それでは、どうして、こうした独裁体制が存続できたのか。それは、「イスラエル」と「油」が背景にある。欧米は、イスラエルの安全保障上脅威となるイスラム過激派、

その温床になるイスラム主義を抑え込む必要があった。そして、石油を確保するために、この地域の安定を望んでいた。

このときも、アメリカは過ちを犯す。自由と民主主義を錦の御旗にしているアメリカが、中東に限っては、独裁者を黙認した。つまり、欧米諸国は、アラブ諸国の独裁的な支配体制に目をつぶり、表向きには中東に自由と民主主義を求めたものの、実際は、中東の安定を優先に、独裁者をいわば必要悪として支援していった。

欧米にお墨付きをもらったアラブの独裁者は、中東での重要なアイデンティティーの1つであるイスラムを危険視し、イスラム主義者たちを徹底的に弾圧していった。これが、独裁者自身、そして独裁者を支える欧米を標的にしたテロを生み、その最たるものとして、2001年の9・11にもつながっている。

アラブの春で、次々に独裁政権が崩壊した。そして、飛び火したシリア。アラブの春を抑え込もうとするアサド政権は、民衆を弾圧した。シリアでは、アラブの春が起きた他の国と状況が異なる点があった。それは、宗派対立になったことだ。アサド政権はシーア派の一派であるアラウィ派、弾圧を受ける住民はスンニ派。そのスンニ派を助けようと、世界各国からシリアに続々とスンニ派の戦闘員が入り込んだ。そして、シリアは泥沼の内戦に突入していく。この内戦で、I Sは、多くの戦闘員を確保し、武器を手に入れ、支配地域を拡大していった。

シリアでアサド政権に弾圧されたスンニ派と、イラクでシーア派のマリキ政権に弾圧されたスンニ派。双方の避難場所を、国境をまたいだ地域に確保する形で、I Sは、支配地域を広げていった。

弾圧からの避難場所。上記にあるように、これは、アルカイダとの共通点である。弾圧は抵抗の心を芽生えさせ、いずれ新たなテロを生む。歴史から学ぶ教訓になるだろう。

I Sは、意見の違いから、後にアルカイダとも対立するが、アルカイダの戦う思想はしつかりと受け継ぎ、シリアとイラクで排除されたスンニ派の怒りを取り込み、シリアの内戦で、ヒト・モノ・カネを得て、武器を奪い、戦術、戦い方を、内戦という実戦で学んで力をつけていった。

## I Sの基本情報



戦闘員（左写真）の半数近くを外国人が占めていると言われていた。裏を返せば、半数はシリア人で、地元の住民ということになる。外国人は、100か国以上から数万人とも言われ、ベルギーからは500人以上、フランスから1700人以上という推計もある。アメリカ軍などによる空爆で、現在、戦力はかなり減っているという見方だ。

I Sに参加した外国人は、衣・食・住が与えられ、給料も支払われている。孫から祖父まで、一家全員でシリアに移住した人たちもいる。I Sの構成要素は、外国人戦闘員、イラクとシリアのスンニ派住民、旧フセイン政権、そして、過激派となる。

I Sが支配しているのは、シリアとイラクをまたがる地域だ。地元の人たちの中には、もちろん、恐怖支配によって強制的にとどまらされている人もいるが、I Sのほうがまだましだと考える人もいる。



I Sは、支配地域でインフラ整備も進めている。税金を取り、裁判も行っている。まさに、国家の体裁を整えている。支配が目的であることがよく分かる。



I Sの広報機関は少なくとも7つあると言われている。欧米向け、組織内部向け、戦闘員向けなどがある。7か国語以上の言語でプロパガンダを発信し、戦闘を美化して若者たちを刺激している（左写真）。

I Sの財源の1つは、支配地域にある油田だ。多いときで、1日に数億円の収入があるとされている。もともとアサド政権下にあったものを奪ったもので、新たに整備したものではない。したがって、油の販売ルートもそのまま利用していると言われている。例えば、トルコ側への密売もその1つだ。密輸業者にしてみれば、3分の1という安い油が手に入るのなら、売っているのがI Sだろうがアサド政権だろうが関係ない。

I Sは、恐怖による支配を続けている。公の場で住民を殺害して恐怖を植えつけている。「恐怖支配は最も効率的かつ効果的な方法」として、旧フセイン政権から学んだ手法だと言われている。

元戦闘員に取材すると、I Sでは、非常にレベルの高い軍事訓練が行われていることが分かった。朝4時から夜10時まで、礼拝やイスラム法の勉強をはさみながら、戦闘員たちは軍事訓練を受けている。レベルが高い訓練は、旧イラク軍の幹部の指導によるものだ。戦闘で捕まえた捕虜に対しては、徹底的に追い詰めて洗脳していく。洗脳が成功すると、自爆テロの要員に加えていくという。

## リビアへ

有志連合による空爆、ロシア軍の空爆とアサド政権の軍による攻勢、そして、イラク政府軍による巻き返しによって、I Sは、徐々に支配地域を失っている。シリアで1割以上、イラクで4割以上を失った。

そうした中、I Sは、リビアに力点を置き始めていると言われている。アラブの春でカダフィ政権が崩壊して以降、内戦状態が続いているリビアでは、混乱に乗じてI Sが勢力を拡大している。I Sは、最近、インターネット上で、「シリアではなく、リビアに行け」と呼びかけていると伝えられていて、すでに5000人の戦闘員が中部のシルトを中心に活動していると見られている。リビアには、シリアやイラクと同様、豊富な油田があり、I Sにとっては重要な資金源となりうる。内戦状態なので、武器も豊富で手に入りやすい。その一方で、上記で説明したような、I Sが支配に利用してきた宗派間対立は、リビアにはない。I Sがこの国で、どのように勢力を伸ばそうとするのか、その手法を厳しく監視する必要がある。

## ISを止めるにはどうしたらよいか

市民の支持がカギを握っている。そのヒントとなる話を紹介したい。アルカイダが痕跡を残したパキスタンとアフガニスタンの各地を取材でたずね歩いたところ、分かったことがある。



地元の住民たちが、アルカイダの兵士を「イスラム戦士」と賞賛し、逃走中に死亡した兵士たちを丁寧に葬っていた（左写真）。そして、アルカイダの兵士たちの墓の土を指でつまんで口に含んでいた。これは最大限の敬意を表す行為だった。また、生き延びた兵士たちには、食事を与えたり家にかくまったりしていたことも分かった。

ジハードというと、武器を持って戦うイメージを持っている人も多いのではないだろうか。パキスタン北西部のペシャワールで、イスラム教の指導者が、モスクに集まった大勢の人たちに説教しているところを取材したことがある。この指導者は、こう言っていた。

「イスラム教徒にとってジハード(聖戦)に参加することは武器を取るだけではない。戦っているイスラム戦士たちに食事や着替えを与えることもジハードに参加することだ。イスラム戦士を守るため、うそをつくこともジハードだ」。

つまり、アフガニスタンやパキスタンでは、大勢の住民がジハードに参加していることを示していた。アルカイダは地元の住民たちにしっかりと守られていたのだ。アメリカはこうした一般市民の「イスラム戦士」を相手に、テロとの戦いを戦っていたことになる。

ひるがえって、ISはどうか。恐怖支配を続け、スンニ派の避難場所を維持している。スンニ派の住民たちは、やむをえずISの支配地域にいるという人のほうが多いのだろう。スンニ派が弾圧される問題を解消し、住民の心をISから引き離すことができれば、ISがこだわる「イスラム国家」という形の支配は一気に瓦解することになるだろう。住民がISを抛り所にする必要がない環境を作ること、それは、シリアの内戦の終結、そして、イラクでの宗派間対立の解消が欠かせない。シリアについては米ロの調停、イラクについては政治指導者たちが融和の道を進めるかにかかっている。

一方で、バングラデシュでの人質事件、アメリカのナイトクラブで起きた銃乱射事件、フランスやベルギーで起きたテロ事件で見られるように、ISの過激な思想に影響を受けたとみられる若者たちの暴走が相次いでいる。こうした過激な思想の拡散は、貧困・格差・差別など、イスラム教徒の若者たちが置かれている社会的な背景があるとされていたが、それだけでは理解できない背景もうかがえる。裕福な家庭で育ち、高学歴な若者も含まれているからだ。学業の行き詰まりや失恋など、個人的な理由があるとも言われている。インターネット、ソーシャルメディアに流される過激な思想が、そうした個別の悩みから解放に導いてくれると誤解しているのかもしれない。この点については、現時点では、具体的な対策は思い浮かばない。それぞれのケースの背景が解明されるのを待ちたい。ただ、インターネット上の過激な思想の発信には、世界が監視を強める必要があり、対策を急ぐ

べきであることは言える。

I Sにはわけがある。テロにも必ずわけがある。暴走するイスラム教徒を止められるのは、イスラム教徒だけだ。世界のイスラム教徒の圧倒的多数は異教徒と平和的に共存することを望んでいる。あの地域で起きていることを世界がしっかり把握し、I Sが利する環境を如何に減らしていくか、イスラム社会とどのような協力ができるかを考えることが必要だ。